

# 九条はらまち

「はらまち九条の会」会報 No.224

2013(平成25)年 9月18日(水)発行



○82年前の1931(昭和6)年9月18日、柳条湖事件(満州事変)を起こし、翌1932(昭和7)年3月1日、満州国を成立させた。日本は中国という外国に軍隊で侵入し、軍事行動を起こし、「満州国」という傀儡政権(かいらいせいけん・日本の命令に従うロボットの国)を建てた、ということは「侵略」したということ。戦後68年の今になって「侵略」を認めないことは、自国の歴史に責任も何の反省もないことです。

「歴史は過去と現在との対話」(EH・カー) 謙虚に歴史を学ばなければ…。

## 南相馬市議会に「脱原発宣言」を要望、看板掲示が決定

■6月の「小出裕章先生講演会」を開催した市民団体「原発いらない・放射能から市民を守る会」(会長白川淳さん(本会会員)・副会長平田慶肇さん(本会会長)・事務局長國分富夫さん)は、9月の南相馬市議会に「市の脱原発宣言」を行うよう要望書を提出。会長の白川さんは、「南相馬市議会は2011年12月に「脱原発」を決議しているが、さらに明確な「宣言」を行い、内外にその意志を強く示してほしい。南相馬市議会が他市町村に先がけて「脱原発宣言」をする意義は大きいし、再稼働阻止に発展させたい」と話しています。■9月13日市議会定例会で、小川尚一市議会議員(本会会員)がこの要望を一般質問し、市内三区の庁舎前に「脱原発宣言都市」の看板を掲示することも決定されました。

## 小泉純一郎元首相が「原発ゼロ」を主張

＜8月26日付『毎日新聞』山田孝男「風知草」より＞

○あの郵政改革の小泉元首相は、8月中旬、脱原発推進のドイツと、フィンランドの核廃棄物最終処分場「オンカロ」を視察し、「脱原発」を確信してきたということです。●帰国しての感想は、「日本の場合、そもそも(廃棄物)の捨て場所がない。原発ゼロしかないよ」●今すぐゼロは暴論という声が優勢ですが、「逆だよ。逆。今ゼロという方針を打ち出さないと、将来ゼロにするのは難しいんだよ。野党はみんな原発ゼロに賛成だ。総理が決断すりゃできる。あとは知恵者が知恵を出す」●「『原発を失ったら経済成長できない』と経済界は言うけど、そんなことないね」とも。



(絵・五十嵐 晃)

●9月24日の講演会でも「政府はできるだけ早く原発ゼロを提示せよ」と再度訴えています。○与党の側から「脱原発」や「9条堅持」の動きが出てもおかしくはありませんが、こうした反政府的・反東電のニュースは、大スポンサー「東電」を恐れてマスコミ界では最小限です。

稼働していた大飯原発3号機が9月2日に、4号機も9月15日に定期検査に入り、全国の原発50機が稼働を停止し「原発ゼロ」となっています。震災後2度目の「原発ゼロ」ですが、電力不足ではおられません。

## この夏「南相馬市原町区石神」出身のお二人日本男性最高齢110歳の「百井 盛さん」、NHKの朝ドラ「あまちゃん」のGMT47小野寺薫子役「本名菅野莉奈さん」が全国的な話題となりました。



○百井盛(ももいさかり)さんは、旧相馬郡石神村(現在の南相馬市原町区石神)出身で1903(明治36)年2月5日生まれ。日本男性最高齢・世界で4番目の110歳です。福島師範学校(現福島大学)卒業後、現福島県立塙工業高校の初代校長。その後埼玉県立与野高校の第5代校長を務め、現在さいたま市にお住まいです。

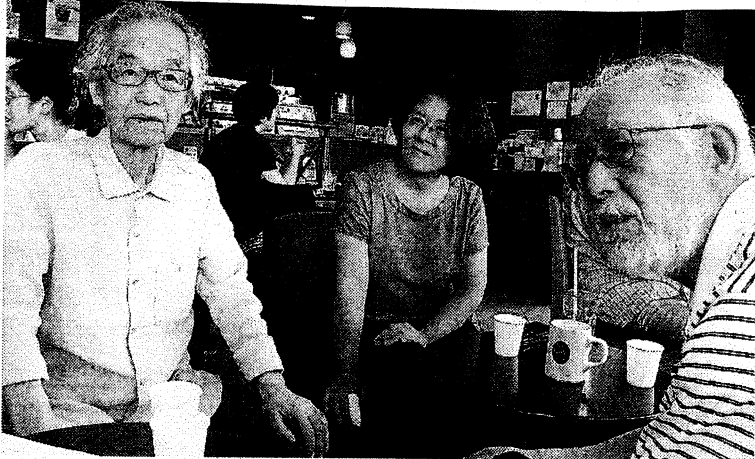


○また、NHK朝ドラ『あまちゃん』に出演、アイドル「小野寺ちゃん」役の、芸名優希美青(ゆうきみお)、本名菅野莉奈さんは、1999(平成11)年4月5日原町区石神生まれ、石神第二小学校卒業生の14歳。震災で山形県に避難。昨年のホリプロタレントスカウトキャラバンで29,521人からグランプリを獲得。今年4月、日本テレビドラマ『雲の階段』で女優デビュー、9月公開の映画『空飛ぶ金魚と世界のひみつ』では映画初主演です。今後の活躍が楽しみです。

# 小高区遠藤昌弘さん 広島で被爆、そして原発事故で再びの被爆が

▼『朝日新聞』2013年8月1日神奈川版夕刊・3日福島版

## 二重被ばく 苦悩を朗読劇に



遠藤昌弘さん（左）から広島と福島での体験を聞く演出家の山口みるさん（中央）と俳優の神山寛さん＝神奈川県大和市、本田雅和撮影

### 8・6と3・11 体に刻まれてる

広島での原爆と東京電力福島第一原発事故で二重に被ばくした遠藤昌弘さん(87)をモデルにした一人語りの朗読劇が、2日から東京・六本木の劇団俳優座で始まった。演じるのは戦争をテーマにした朗読劇を続けてきた俳優の神山寛さん(80)だ。

○南相馬市小高区の遠藤昌弘さんは、広島で被爆体験をされ、さらに今回の事故原発の放射能から逃れる様子は、会報二八号に掲載しました。○八月初め、遠藤さんの体験が劇団俳優座で、『左記』のように一人語りの朗読劇になっています。  
(記事中の山口さんが見つけた被爆者証言集とは、一九八三年「原水爆を考える原町市民の会」発行の『私も証言する』のことです。)

「8月6日と3月11日。どうしても忘れられない、二つの日付が私の身体と人生に深く刻まれている」。南相馬市小高区から神奈川県相模原市に避難している遠藤さんは語る。福島市で生まれた。太平洋戦争の敗戦直前に召集され、中国大陸から内地へ転戦するなかで体を壊し、広島市内の陸軍病院に送られた。爆心地から2・5キロの病院で被爆。「黒い雨」にうたれたながら、皮膚がずるむけになった人たちとともにさまよった。戦後、故郷に帰り、旧小高町(現南相馬市)の役場の職員になった。退職し、趣味の俳句と茶道を楽しみながら暮らしていた。そんな平穏な日々は原発事故で暗転した。2日目の3月12日、原発の爆発直後から、

## 南相馬・遠藤さん「安全と信じた」

財布と健康保険証、被爆者手帳だけを持ち、妻(84)と長女(58)、家族3人による逃避行が始まった。寒い日でも雪がはらばらと降ってきた。空を見上げた瞬間、広島で黒い雨にうたれたときの感覚がよみがえる。「これも汚染されとるに違いねえ」と肩に降りかかる雪を必死で振り払った。自宅から北10キロの体育館に3泊したあと、県内の親類宅を経て相模原市内の長女の知人宅に身を寄せた。「まさか2度も放射能におびえることになるなんて。本当に腹立たしい」と、詠んだ句が「目に見えぬものに追われて 春寒し」だった。遠藤さんと朗読劇を結びつけたのは、演出家の山口みるさん(50)。俳優座の朗読劇「戦争とは…」の今夏の題材を探していた神山さんの友人だ。山口さんは震災後、自宅にあった父親の蔵書から、30年前に南相馬市で発行された被爆者証言集を見つけた。その中にある遠藤さんの言葉の率直な表現に心を打たれた。あの光景を思い出すのが嫌で広島に行っていないこと。原発誘致にかかわったこと。道路用地の取得交渉で「原発は原爆と違い平和産業。私自身被爆者だから放射能の怖さはよく分かっている。だから安全を守る」と言い、地主を説得していたこと。そうした事実や思いがこぼれ出ている。山口さんは今年6月、遠藤さんの原発事故の被災を知った。神山さんともに遠藤さんを訪ねてインタビューし、脚本にする了解を得た。「あの戦争に勝つと信じ切っていたように、原発も安全だと信じていた。内心忸怩たるものがある」と遠藤さんは語る。朗読劇は、4日まで俳優座で開かれている。「自分の体験が、平和のために少しでも役立てば」。近いうちに、広島を訪れたいと思うようになった。あのときの体験はいったい何だったのか。あのときの自分ともう一度、向き合うために。(本田雅和)

○9月9日、相模原市に避難中の遠藤さんを東京新聞飯田孝幸記者が取材。事務局山崎も立ち会いました。その中で、昭和22年平和憲法が制定された時、遠藤さんは「ああ、もう戦争で死ななくてもいいんだ」と思ったそうです。貴重な重い言葉です。○そして遠藤さんは当日「はらまち九条の会」に入会されました。